

ぶれない頭と眼を養う「哲学的訓練」

——指針なき現代の一步先を読み解くための実践講座

佐藤 優 （聞き手・小峯隆生）

※外交の最前線で培った対人術の要諦をまとめた書籍『人たらしの流儀』で、佐藤優さんの聞き手を務めた小峯隆生こと、私は、筑波大学で『コミネ語り』と称した講座を不定期でおこなっている。私の講座に、佐藤優さんをゲストスピーカーとして招き、始めたのが、このワークショップ。新しい世界観を身につけるべく、今月も、ともに学んでいこう。

第十回

竹島問題と神話と AKB48

佐藤 前は、ナショナリズムや、民族の誕生について学びましたが、今回は、その民族をまとめるためには神話が有効であることについて、考えてみましょう。

8月15日は、終戦記念日ですね。韓国では光復節にあたります。日本の植民地支配から解放され、光が回復した日となっています。

タイムマシンに乗って、1945年8月15日のソウルと平壤^{ピョンヤン}に行くと仮定しましょう。そこで、見られる光景はどんな光景でしょうか？

——解放されたわけですから、皆、大喜びで、お祭りとかはじまったのではないですか？

佐藤 違います。実際は、玉音放送を聞いて、みな、泣いていました。

——大日本帝国の臣民、という意識だったわけですか。

佐藤 大日本帝国の外地臣民。特攻隊としても多くの韓国人が学徒動員で出撃しました。一部に戦争終結を喜んだ人もいたと思います。ただし、まだ日本軍が現地に残っていますので、日本人の軍人たちか

ら睨まれるかもしれません。目立った動きはできなかったでしょう。

8月17日になってからようやく、朝鮮半島は解放されるんだという情報が入ってきます。そこではじめて、解放された喜びを体現していきました。

だから、8月15日、16日の時点では、韓国人は、大日本帝国の外地臣民として、悲しみにくれて、泣いていたのが実相です。

いまの 8 月 15 日の、光復節の物語はあとづけでできたとも言えるわけです。
こうしたあとづけ感の強い話の一つに「竹島問題」があります。

竹島、韓国でいうところの^{ドクト}独島は、韓国の「国家神話」と強く結びついています。

同じような領土問題の北方領土の問題とはかなり状況が異なります。

日本と韓国の間で、竹島は、当初そんなに大きな問題ではなかったんです。

——なんで、こんな深刻になったんですか？

佐藤 大きな転換となったのは、1952 年 1 月 18 日に、韓国の大統領・^{イスンマン}李承晩が、海洋主権宣言をおこなった時点です。

竹島問題に関しては、川上健三さんが書いた『竹島の歴史地理学的研究』という希少本があります。

日本の竹島に関する理論武装は、この本の中で基本的に述べられています。

川上さんは、私が 1984 年に外務省に入った時、もうリタイヤしていましたが、外務省の中に部屋を持っていました。

もともと、ノンキャリアの外交官でした。北方領土、漁業問題の神様と言われていた人物です。

竹島の問題に関する川上さんの基本的な議論は、その本の最初の 2 ページ半で、言い尽

くされています。

竹島問題について、1954年9月に「これは領土権の話だから、国際司法裁判所で解決しましょう。仮に国際司法裁判で、日本側はいかなる判決が出ても、日本側はすべて受け入れます。その判決が出るまでは、お互いに武力衝突が起きないように暫定的なメカニズムを作りましょう」と提案しましたが、韓国側はすべてを突っぱねてきました。

再び2012年にも国際司法裁判所がもう一度出されたというわけです。

このように過去も現在も竹島問題は、平行線のままなのです。

この本をあたっていくと、日本に分が悪いこともわかっています。

韓国人の玄大松先生による研究『領土ナショナリズムの誕生—「独島／竹島問題」の政治学』（ミネルヴァ書房 2006年）にこんな記述があります。

〈独島、竹島問題に第三の波が寄せてきた1996年、ある韓国世論調査機関の調査に、98.6%の韓国人が、独島は自国の我が領土と答えた〉

98.6%の韓国人が、我が領土と答えている。これは余程の変わり者を除いて、国民ほぼ全員ということですね。

そして、玄大松先生の記述の中で上記に続いて、次のようなことも書いてあります。

〈ウィトゲンシュタインは、疑うことなく信じる知識や、反対のことが想像できない命題を、文法命題（grammatical proposition）と定義したが、まさに韓国人にとって「独島^{イコール}＝韓国の領土」とは、文法命題であり、常に真となる恒真式である〉と。

——ウィトゲンシュタイン?? 文法命題?? 恒真式?? なんだか、難しくなってきました。

佐藤 順に説明しましょう。ウィトゲンシュタインと出てきましたが、ここでウィトゲンシュタインについて説明しましょう。彼は、オーストリア出身のオーストリア人です。イギリスのケンブリッジできょうべん教鞭を執りました。数学者であり、哲学者であり、言語学者であり、論理学者です。

また大金持ちの家の子どもでもありました。

ウィトゲンシュタインは、前期と後期で考え方・主張が変わりました。前期では『論理哲学論考』という本を書いています。

この世には、言葉によって言い表せないものが存在する。それは、言葉によって描写されるのではなく、逆に、言葉によって描写されないというかたちをもって、「示される」のである。したがって、「語りえぬものについては、沈黙せねばならない」と述べています。

つまり、説明できないことについては沈黙しないといけない、というわけです。

さらに論理というのは、はしご梯子を使って1階から2階に上がるようなものだ。そして2階に上がったら、その梯子は蹴っ飛ばして捨てしまわないといけない。

だから学問というのは一生懸命やる必要があるが、あることがわかったら、わかった時点でそれまでの学問はすべて無駄である。こういう不思議なことを言っている人でした。

ところが後期、ケンブリッジに迎えられた頃からですが、『論理哲学論考』での記号論理学中心、言語間普遍論理想定の哲学に対する自らの姿勢を変え、コミュニケーション行為に重点をおいて哲学の再構築に挑みましたが、完結することなく世を去りました。

『論理哲学論考』での記号とか論理ということ全部捨てちゃって、思想というのは日常言語、普段喋っている言葉でしか表せない。記号で全部表したり、説明したら、漏れてしまうものがたくさんあるという立場に立ちました。

この影響を強く受けているのが、経済学者のジョン・メイナード・ケインズです。ウィトゲンシュタンはケインズの友だちでした。

だからケインズの一般理論を読むと、数式がほとんど使われていない。近代経済学であるにもかかわらずです。

それはどうしてかということ、経済を数字にして数学化してしまうと、そこから漏れてしまう残余の部分は「日常言語」でしか説明できない。

そうすると、ヨーロッパやアメリカと比べて、イギリスで哲学を学ぶということはとても大変なことだとわかります。

日本人学生が哲学を勉強したいといってイギリスに留学すると、大体は受け入れてもらえない。どうしてか。

「私は昨日学校へ行った」と、「私は昨日学校に行った」では、「へ」と「に」でどうふうに意味領域が違うのか。

イギリスの哲学ではこうした研究をしているわけです。

ここでは言語哲学ですから、英語のネイティブでもない限り、哲学を学ぶことは、ほとんど議論についていけないわけです。ですから、「純粋な哲学ではなくて、哲学史であるとか、宗教学や心理学を勉強したらどうですか？ あなたは英語のネイティブじゃないから」と、薦められてしまいます。

ここで、本題に戻りますが、そのウィトゲンシュタインを例に引いて、玄大松先生は、竹島問題を文法命題と言っているわけです。

文法命題というのは、次のように考えると理解しやすいかもしれません。

いま、我々がこうやって日本語を喋っているでしょう。

日本語の文法って、小学校、中学校で少し勉強し、高校でも勉強するけど、大半がしっかり勉強していないでしょう。でも日本語、みなさん話せますよね。自然に頭の中に刷りこまれています。

日本語を話すとき、文法的にどうだというのは、日常的に考えてはいないでしょう。つまり日本語の文法に関しては、我々は疑問というのを一切持たないわけです。しかもそれは日本人にしか通用しない。

韓国人にとっては、竹島（独島）が、文法命題になっているというわけです。

玄大松先生は、〈まさに韓国人にとって「独島＝韓国の領土」とは、文法命題であり、常に真となる恒真式である〉とも書いています。

恒真式とは、恒（つね）に真となる論理命題で、これは絶対に当たる天気予報だと思えばわかりやすいでしょう。

例えば、「明日の天気は晴れか晴れ以外のいずれかです」。

この天気予報は絶対に当たりますよね。100%当たります。でも、天気に関する情報は何も言い表していない。これが恒真式です。

別の言い方をすると、トートロジー。同義反復・同語反復表現です。

さて、1996年の調査で、98.6%の韓国人が、我が領土と答えた同時期、日本で行われた調査では、竹島を自国の領土とする韓国の主張は妥当かという質問に、

「いいえ」	52.5%
「はい」	11.5%
「わからない」	35.8%

こうした結果が出ました。李承晩による海洋主権宣言の時には、ここまで意識の差は、ありませんでした。

しかし、その後、独島神話というのを韓国は作り出しました。

それは、現代の韓国人を結束させる根幹の一つになっています。

韓国の国家体制の基礎、日本の古い言葉で言うならば、国体です。韓国にとっての国体が、独島なのです。

それに対して、北朝鮮は、独島神話を持っていません。北朝鮮は、白頭山の、金一族の話が北朝鮮の神話です。

— 民族を建設し一つに結束させるには、神話が必要なんですね。

佐藤 韓国は、その神話を独島という島に結び付けることに成功しました。

だから、日本が独島に対して、何か言うと、韓国は、日本に対して天皇を持ち出してきます。日本における天皇と同じ位置に、韓国では独島が存在しているのです。

日本は竹島を領土問題として話している。しかし、韓国は、それは神話に関しての話。領土問題ではないので当然、話は擦れ違いを繰り返します。しかし、その神話は、人間があとから作り上げた作り話だと検証できるものなんですけれどね。

そんな神話を、あれだけ信じている。

歴史というのは、いろいろなものから作られていることが垣間見えてきます。

神話も、その一つです。

人間が作り出したこういう事柄は、それ自体に人間が囚われてしまうことがあります。

これを明確にしたのが、マルクスです。

マルクスの物神崇拝という考え方です。

その物神崇拝のポイントは、何でしょうか？

それは貨幣です。1万円札を印刷するのに、そのコストは1枚いくらか知っていますか？

— 確か、1枚 20円前後です。

佐藤 そうですね。それなのに、なぜ 1 万円の品物を変えたり、サービスを受けたりすることができるのでしょうか？

もっと言うと、電子マネー。あれはお金自体に製造コストがかかっていません。そこにあるのは電子的な情報だけでしょう。しかし、われわれは、それによって欲望が実現できる社会に暮らしています。

近代経済学は、貨幣がどうして出来ているのかについてあまり研究しません。

お金というのは、「ありてあるもの」という感覚から出発している。

それに対して、マルクスは、『資本論』その第 1 巻で、貨幣は どうして生まれたのかという研究をしている。

私が、麻布（リンネル）をたくさん持っているとします。

そこで、私が、「お茶が欲しい」と思った。その時、お茶を持っている人と、この麻布と物々交換したいと思っても、お茶を持っている相手が、私の持っているこの麻布を欲しいかどうかは分からない。

だから、一度、皆が交換してくれて、分割可能な貨幣に、物を 1 回、換えないとならない。

貨幣に換えれば、必要なものを、その貨幣の利用に応じて受けられる。

貨幣の誕生によって、いまや人と人の関係すら、貨幣が握っているわけです。

先の「人間が作り出したこういう事柄は、それ自体に人間が囚われてしまう事がある」になっているわけです。

フランスの経済学者ジャン・バティスト・セイが提唱した、『セイの法則』というものがあります。「供給はそれ自身の需要を創造する」とする古典派経済学の仮説です。

あらゆる経済活動は物々交換にすぎず、需要と供給が一致しないときは価格調整が行われ、仮に従来より供給が増えても価格が下がるので、ほとんどの場合、需要が増え需要と供給は一致する。それゆえ、需要を増やすには、供給を増やせばよいということなのですが、でも、それは、必ずしも正しいとは限りません。

需要がないところに、どんどん供給（商品）を増やしても、最終的に必ず売れて貨幣になるとは言えませんね。

しかし、貨幣自体は、それがあれば、欲しい商品は何でも手に入ります。

ここに、非対称性が見られます。

貨幣の誕生により、時に人はお金のために殺し合いもします。

このように人々が理性を失い、貨幣にとられる姿を見て、物神崇拝だと、マルクスは言いました。

この物神崇拝は、何もお金だけには限りません。

——他に何かあるのですか？

佐藤 竹島しかり、AKB48にも、物心崇拝の精神が見てとれます。人間には、いわば、こうした神様を作り出す力がある。

そうしたことを冷静に見ないといけません。

AKB48 のファンからすると、AKB48 を罵倒したり、メンバーの誰かについて可愛くないと語ったり、という輩は許せないはずですね。

仮に国民全員が、AKB48 のファンになっている状態を想像してみてください。そこに、海外から AKB48 に対する批判の声があがったら……。

——そりゃ、国家として、その反 AKB48 を叩く行動に出ますね。

佐藤 国家として、AKB48 神話が、できている状態です。

——その神話に対して、「それは、作り話ですよ」なんて、絶対に言えないですね。

佐藤 その AKB48 を支えるために、CD を 100 枚単位で買うファンたちが、大勢います。

——アルバムならば、1 枚 3000 円しますもんね。

佐藤 100 枚買えば、30 万円。1 万円札が 30 枚です。月給、もしくは賞与をすべてつき込む人が大勢います。ちょっと異常な熱狂振りではないでしょうか。

同じように、竹島も、そのために命を失ってもいいという韓国人がたくさんいます。

——神話を守るためには、命をかけるでしょうね。

佐藤 我々、日本にもいろいろな神話があります。

だから、真の知識人たる者は、いつの時代も「本物」になってはいけません。

「本物」になって、「竹島は我が国固有の領土である」となって「討つべし」となったり、命がけで、竹島に上陸して、「日の丸を掲げてやる」、そうならないのです。

常に物事を冷静に見る目を養わなくてはならないのです。

〈つづく〉

今月の内容をより深く学ぶための本

『竹島の歴史地理学的研究』川上健三著（古今書院）

『論理哲学論考』ウイトゲンシュタイン著／野矢茂樹訳（岩波文庫）

『領土ナショナリズムの誕生—「独島／竹島問題」の政治学』玄大松著（ミネルヴァ書房）